



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	外来受診解析に基づくてんかん患者の行動特性に関する研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	中村, 悠一
Description	配架番号 : 2816
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(医学)
Dissertation Number	甲第15687号
Issue Date	2023-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91346
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	NAKAMURA_Yuichi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（医 学） 氏 名 中村 悠一

学 位 論 文 題 名

外来受診解析に基づくてんかん患者の行動特性に関する研究

(Studies on Behavioral Traits of Patients with Epilepsy Based on Analysis of Outpatient Visit)

【背景と目的】 てんかん患者、特に特発性全般てんかん（IGE）患者は、服薬アドヒアランスの欠如によって不利益を被るリスクが高い。受診行動が服薬アドヒアランスの代替指標となる可能性が示唆されている。我々は、IGE 患者は他のてんかん診断と比較して受診のアドヒアランスが不良である仮説を立てた。これを実証するために、てんかん患者における受診行動（欠席と遅刻）を評価し、てんかん診断を含む様々な因子との関連性を検証することとした。

【対象と方法】 2017 年 1 月～2019 年 12 月に北海道大学病院精神科神経科を受診したてんかん患者を対象として後方視的研究を行った。てんかん患者に関する人口統計学的データおよび臨床データを診療録から、受診データを医療情報システムから抽出した。外来予約の欠席を「事前連絡なしに予約日に現れない場合」、外来予約の遅刻を「来院時間が予約時間を 15 分超過した場合」と定義して評価項目とした。欠席と遅刻のそれぞれを目的変数とし、抽出した因子を説明変数として、混合効果ロジスティック回帰分析を実施した。それぞれ下位診断ごとのサブ解析を行った。さらに、研究対象者をてんかんの下位診断ごとに層別化した後、主解析と同様の解析をサブ解析として実施した。

【結果】 欠席とてんかん診断の関連性の検証を目的とした研究では、総予約数 9151 件のうち、413 件が欠席であり、全体の欠席率は 4.5%であった。欠席を目的変数とした混合効果ロジスティック回帰の結果、IGE の診断は焦点てんかん（FE）と比べて欠席の増加と関連していた（オッズ比（OR） 2.02；95%信頼区間（CI） 1.20-3.39； $p=0.008$ ）。生活保護受給歴は欠席の増加と関連していた（OR 2.35；95% CI 1.38-4.02； $p=0.002$ ）。高学歴（大学・専門卒以上）は欠席の減少と関連していた（OR 0.64；95% CI 0.43-0.96； $p=0.029$ ）。IGE 患者のみを対象としたサブグループ解析の結果、午後の予約は欠席の減少と関連していた（OR 0.38；95% CI 0.20-0.71； $p=0.003$ ）。若年ミオクロニーてんかん（JME）の診断は JME 以外の IGE と比較して欠席が少ない傾向が示されたが、有意な差ではなかった（OR 0.39；95% CI 0.14-1.09； $p=0.072$ ）。FE 患者のみを対象としたサブグループ解析の結果、側頭葉てんかん（TLE）の診断はその他の FE と比べて欠席の減少と関連していた（OR 0.58；95%CI 0.35-0.95； $p=0.032$ ）。生活保護受給歴は欠席の増加と関連していた（OR 2.37；95% CI 1.32-4.26； $p=0.004$ ）。高学歴（大学・専門卒以上）は欠席の減少と関連していた（OR 0.60；95% CI 0.38-0.94； $p=0.025$ ）。

遅刻とてんかん診断の関連性の検証を目的とした研究では、総来院 8738 回のうち遅刻は 599 回であり、全体の遅刻率は 6.9%であった。遅刻を目的変数とした混合効果ロジスティック回帰の結果、男性と比べて女性は遅刻の減少と関連していた（OR 0.61；95% CI 0.41-0.93； $p=0.020$ ）。39 歳未満と比べて 40 歳以上は遅刻の減少と関連していた（OR 0.54；95% CI 0.35-0.83； $p=0.006$ ）。午前の予約に比べて午

後の予約は遅刻の減少と関連していた (OR 0.64 ; 95% CI 0.48-0.84 ; $p=0.002$)。てんかん診断と遅刻との明らかな関連は確認されなかった。IGE 患者のみを対象としたサブグループ解析の結果、午後の予約は遅刻の減少と関連していた (OR 0.38 ; 95% CI 0.20-0.73 ; $p=0.003$)。JME の診断は JME 以外の IGE よりも遅刻が少ない傾向があったが有意差を認めなかった (OR 0.37 ; 95% CI 0.13-1.04 ; $p=0.060$)。FE 患者のみを対象としたサブグループ解析の結果、女性は遅刻の減少と関連していた (OR 0.61 ; 95% CI 0.39-0.98 ; $p=0.039$)。40 歳以上は遅刻の減少と関連していた (OR 0.59 ; 95% CI 0.36-0.97 ; $p=0.037$)。就労・就学中は無職と比べて遅刻の増加と関連していた (OR 1.69 ; 95% CI 1.00-2.85 ; $p=0.050$)。午後の予約は遅刻の減少と関連していた (OR 0.69 ; 95% CI 0.50-0.95 ; $p=0.023$)。

【考察】 欠席とてんかん診断の関連性の検証を目的とした研究では IGE 患者の欠席が多いという結果が得られたが、これは IGE のパーソナリティ、あるいは認知特性が影響している可能性が考えられる。病気に対する無関心、規律の欠如、快楽主義などの JME のパーソナリティ特性や、実行機能障害、衝動性、リスクをとる行動、社会認知の障害など、前頭葉機能と関連する報告が多数存在する。これらの特性が欠席の増加に影響している可能性が考えられる。TLE はその他の FE と比べて欠席のオッズが低いという結果が得られたが、これも粘着性、過剰道徳性などの TLE のパーソナリティ特性が影響している可能性がある。

欠席とパーソナリティ特性が関連する可能性があること、受診行動指標のうち来院時間はパーソナリティ特性を反映する可能性があることから、遅刻とてんかん診断の関連性の検証を目的とした研究では「てんかん診断は欠席と同様に遅刻と関連する」という仮説を立てて実施した。しかし、てんかん診断と遅刻との関連は示されず、上記の研究仮説と反する結果となった。欠席と遅刻はともに不適切な受診行動だが、本研究では先に来院の有無によって欠席が取り除かれ、残された来院のうちの不適切な行動として遅刻を観察した。不適切な受診行動の一部が先に除外されることで、遅刻が有する不適切性が相対的に軽減したことが結果に影響した可能性がある。

【結論】 てんかん患者の診断は受診行動に影響を与える。IGE 患者は FE 患者と比較して外来受診の欠席の頻度が高かった。TLE 患者はその他の FE 患者と比較して欠席の頻度が低かった。てんかん患者の診断と外来受診の遅刻には明らかな関連を認めなかった。てんかん患者を対象とした受診行動研究の結果、欠席と関連する要因として、診断、生活保護受給歴、教育歴が、遅刻と関連する要因として、年齢、性別、予約時間が同定された。日常臨床において患者の治療アドヒアランスの予測精度を高めるために、鑑別診断に十分に注意を払う必要がある。治療アドヒアランスが不安定な集団に対して、治療アドヒアランス向上のための指導を重点的に行う必要がある。